

及をおこなうことを決定しました。

SAKAIの名前は鉄人料理人坂井宏行氏に由来し、アメリカ、メロン財団基金を基に2004年SAKAIプロジェクトが結成され、既存のANGELラーニング、WebCT、Blackboardに対抗できるシステム作りがなされました。ミシガン大学の“CHEF”をベースに、インディアナ大学、MIT、スタンフォード大学、uPortal、the Open Knowledge Initiativeなどアメリカの主要大学、研究機関が開発に加わっています。

出席者の感想は、SAKAIはWebCTに比べ入力が簡単で、使いやすいとのことでした。SAKAIは、これまでの文書配布、採点簿、討論、雑談、宿題提出、オンライン・テストなどの講義用のコース・マネージメント・システムに加え、研究やプロジェクトへの使用も配慮されており、さらに百科事典、メーリングリスト、RSS (RDF サイト・サマリー) リーダー機能を持っています。(松本哲男)



SAKAI実習中

第7回 オープンフォーラムを開催 アフリカにおける稲作振興の 現状と今後の日本の役割 —NERICAの研究と 普及を例として—

会 場：名古屋大学野依記念学術交流館
開催日：2006年10月20日

サハラ以南アフリカ諸国では近年米の需要が急増し、その輸入に多額の外貨を使っています。米の増産によって外貨が節約できれば、その分、国連ミレニアム開発目標の中でも重視されている貧困削減に回すことができます。わが国は2003年9月の第3回

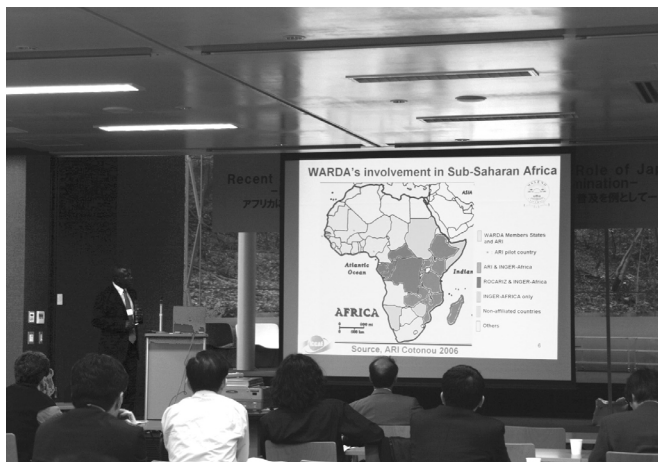
アフリカ開発会議 (TICAD III) 以降、アジア稲とアフリカ稲の長所を組み合わせた陸稲ネリカの研究と普及に力を注いでいます。

ケニアのオニャンゴ本センター客員教授 (ケニア・マセノ大学理学部長) が、土壌の乾燥、適応品種の選定、在来技術を活かした栽培技術、農民教育と優良種子増産による普及の促進、行政の持続的な支援などについて基調講演で分かりやすく説明されました。

日本人研究者からは、イネの根の水ストレス反応の妙味、日本の77年間の陸稲育種研究の成果、耐乾性・早生性最新品種の紹介、水田普及や水管理技術の普及によるアフリカでの「緑の革命」への期待、農民教育の必要性などの研究成果が報告されました。

また、国際農林水産業研究センター (JIRCAS)、国際協力機構 (JICA) 及び笹川アフリカ協会などによるアフリカの稲作振興の取り組みが報告され、外務省もその活動を強く支援していることが分かりました。

アフリカで米の生産力を今以上に上げるには、適性品種や栽培技術の開発、陸稲の場合特に問題になると予想される土壌生産力の維持管理技術や降雨や河川水の効率的な利用、収穫後の品質管理などまだ多くの問題があります。日本が研究者や技術協力専門家などの総力を挙げて地道に取り組んでいくことがもっとも早い道であることを確認できたフォーラムでした。(浅沼修一)



基調講演をするオニャンゴ教授